

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Gifted Program (英才教育)やとび級制度の低い定着率について
Author(s)	'
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 16期 : 33 - 37
Issue Date	2002-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038887
Right	
Relation	



Gifted Program（英才教育）やとび級制度の低い定着率について

Bigelow, Adam

世界のどこの国にも学校があります。そして、その学校の目的はほとんど同じです。なのに、ある国でできたカリキュラムを別の国ではできないと言う現象がよく見られていると思います。エリートな学生、優秀な学生を作ると言う目的において統一していても、同じ方法でその目的を負うわけには行かないのです。なぜかと言いますと、学校の目的が同じであっても国によって学校外からの影響、つまり環境の影響が大きく異なって来るからです。アメリカや欧米諸国で普通だと思っているとび級制度やGifted Programを考えて見ましょう。何十年前から学校のカリキュラムの一部として存在しているこれらのものはなぜ日本がいくら苦勞してもうまく導入できないのか？その答えは皮肉に学校の中で見つかることなく、学校以外の所にあるのです。ところが、原因は一つと言わないのです。そう言うことは行けません。このペーパーでは文化と言う一面だけを取り上げますが、これは全てではありません。三六〇度全角度から日本の学校は影響されています。可能性のあるすべての発想を考えてはじめて日本の学校のやり方が分かるのでしょうか。

日本教育の現状（「平成12年度学校基本調査速報 統計表一覧」参照）

学校数

小	24,106
中	11,209
高	5,478

合計 40,793

※上のデータは国立、県立、私立、公立、私立、あるいはあらゆる学校の種類を含めたものである。

在学者数

小	7,366,080
中	4,103,716
高	4,165,435

合計 15,635,231

※上のデータは国立、県立、私立、公立、私立、あるいはあらゆる学校の種類を含めたものである。

これらの数字に対してまたもう一つ大事なことをご紹介しますと思います。それが明治初年、日本は欧米からの教育制度を導入した時の出来事ある。英語で言う「Education <才能を引き出す>」、と「Teaching <教育>」を勘違いしたのではないかと思います。その結果、日本の教育は子供の潜在才能を引き出す制度からただの記憶力かつ暗記力を強化する制度に変わったのである。言葉を換えていますと日本の学校は子供たちにとって可能性の寄生虫になったと言っても言い過ぎではないかと思う。しかし、このひどいと言ってもいいような実状を認めて、挑んでいる校長先生がいらっしゃるのです。尾道市立栗原北小学校の友宗直校長は次のように言われています。「{私たちの学校では} 抱えている一番の問題はどのように子供の才能を引き出せばいいかという問題である」。この発言に対してアメリカで行われているいくつかのものをご紹介しますと思います。

以下のチャートは 1901 年から 1985 年までのノーベル賞の受賞者の出身地と数を示している。

国名	物理学賞	化学賞	生理医学賞	経済学賞	計
アメリカ	47	28	68	13	156
イギリス	19	22	23	3	67
ドイツ	16	25	11	0	52
フランス	9	6	8	0	23
スウェーデン	4	4	6	2	16
オランダ	6	2	3	2	13
ロシア	7	1	2	1	11
オーストリア	3	1	5	1	10
スイス	0	4	5	0	9
デンマーク	3	0	4	0	7
イタリア	3	1	2	0	6
ベルギー	0	1	3	0	4
ハンガリー	0	1	2	0	3
日本	3	1	0	0	4
その他 13ヶ国	5	5	7	1	18
計	125	102	149	23	399

(1985 年から現在までノーベル賞を獲得された日本人は 3 人います。化学賞授与者白川秀樹博士 (2000 年)、文学賞授与者大江健三郎氏 (1994 年)、生理医学賞授与者利根川進博士 (1987 年)。

このチャートを見ておかしいと思わない人はいないだろうと思いますが、それらの気持ちに対して行動を起こす人は数少ないだろう。いったい何が起きているのだろうか。学者にとって最高の報いであるノーベル賞を 100 年の間四つしか取っていないのは何故でしょうか。ノーベル賞が学習の目的だとすればたどり着かない理由は学習の過程にあるはずです。

飛び級制度の導入について

2001年6月29日の日付けで文部科学省は次の発表をホームページに載せました。「特定分野で特に優れた資質を有する者の大学への17歳入学、大3年修了からの大学院入学」（教育改革関連6法の成立を受けての文部科学大臣談話）を可能にする。これはまさしく待ちに待った飛び級制度の始まりかも知れません。

日本で今年までかかってきたこの飛び級制度はドイツやアメリカで前からあったものです。実は私自身も小学校に1年早めに入学した者です。しかし、ドイツなどの欧米諸国では飛び級は大学入学に限られていまして、小・中学への飛び級は非常に珍しいものです。アメリカのほとんどの州では小学への入学は7歳にされていますが、実際は、多くの子供は6歳から学校に通うようになっています。そして、能力は十分に高いと認められた場合、6歳よりもっと早めに入学することができます。

上に引用したことばによると今年から日本は飛び級制度を導入したと読み取る人がいるかも知れません。しかし、そうではありません。大学への進学を17歳の人だけ許すのでは十分ではありません。現在、学校における問題が増えています。その一つの原因として現在の学校では子供たちが子供の能力のレベルで勉強できるようになっていないと考えられます。1年生のクラスの中、2年生と思えるほど非常に算数などに優れている子供がいるではありませんか。その子供の能力に合わせない限り、授業中退屈したり、時には荒れたりするでしょう。元々学校が好きだと言っていた子供なのに一体どうしたのでしょうか？これは全てだと決して言っておりませんが、文部省が挙げている「個性を育てる」と言う目標を達成するために飛び級制度を導入する必要があると思います。

今の文章を読んで、「一人一人に合わせるのは無理や」、と思っている人がいるでしょう。もちろん、一人一人の学生を個別してカリキュラムを作ることはあり得ないことです。しかし、すでに学年の条件を満たしている子供のためにさらに能力を引き延ばす場を作ることができるでしょう。人間の脳は筋肉のように使えば使うほど強くなるのです。今のままが続ければどれだけの子供たちの能力や潜在才能が潰されるでしょう。

導入すべきカリキュラム

アメリカでは T.A.G. (Talented and Gifted [才能に恵まれている], 小学1年～4年) というプログラムがあります。週二回か三回能力に優れている子供たちが集まって、見学旅行をしたり、普段学校で勉強しないギリシアの神話や芸術などを勉強します。このようにして、授業の時に教室が静かで、子供たちはよく勉強できています。4年生になったら、6年生までの間、優れている能力を持っていると認められたら（年1回試験によって評価する）P.A.C.E. (Promoting Advanced Child Education [子供の教育を進めるために]) というカリキュラムに参加することができます。もちろん、入るかどうかはその子供の自由です。P.A.C.E. では学生たちは1学年の間一つのテーマをもって研究します。たとえば、アメリカの南北戦争、ローマ帝国の歴史などの学生にとって非常に楽しくておもしろい題

材があげられています。そして学年末に特別に見学旅行（キャンプなど）に行きます。そこで、学生たちは実体験によって1年中研究してきた当時の人々の生活ぶりについてしみじみと学びます。見過ごしてはならないのがもう一つあります。それは学期末になると P. A. C. E. に実際に参加した学生たちが集まって次の学年のテーマを決める会を開くという必要不可欠手段です。これで勉強は文字通り子供のものとなり、子供たちは積極的になるのです。このようなプログラムを日本の教育制度に取り入れるとしたら、子供たちはどれだけ喜ぶでしょう。

日本式 Gifted Program ととび級制度

日本では今まで話して来た Gifted Program と少し違った形の Gifted Program らしいものがあります。色々な人と話してみましたが、その中で Gifted Program がなかった人数が多かった。そして、あったと答えた人は皆県立高等学校に通った人ばかりでした。そこで普段はグレード別クラスや進学クラスなどという形で行われているそうです。しかし、全ての科目に及ばず、理数系と文系（英語含める）に限られていると見られています。とび級制度を使用している学校は見当たりませんでした。今年、文部科学省で発表されたように、大学入学を17歳の人に許すというのですが、これも実は普通の人に当てはまらなくて、海外で早めに卒業して帰国した日本人のみのための制度です。

導入できないその原因の一つである「文化」

文化という視点から見ると色々な原因が考えられます。

1. 日本人は横並びを良しとする傾向が非常に強いために Gifted Program などの定着ができません。それが才能、あるいわ能力を最優先せず、学生を一人一人同じように取り扱う風習なのです。数年前まで、型にはまるという言葉で言い表した考え方ですが、現在、平和を保つという言葉になっていると思います。どうせ、同じことではないかと思えます。
2. このペーパーの対象になっているのは公立学校です。つまり、民衆が払っている税金で供給されている機関であるということを忘れては行けません。私立学校に通う学生のほとんどはその学費が自己負担であって、ある程度カリキュラムに自由があります。しかし、平等に税金を支払っている民衆はあくまでも差別らしい Gifted Program を許すはずがないのです。天才児は多半数にならない限り、天才児のみを対象とするカリキュラムは成り立ちません。
3. これは外国人の未熟の意見に過ぎないかも知れませんが日本社会は大人中心の社会

であって、未成年のための居場所がないと思います。仕事帰りに一杯をするのを楽しみにする日本社会、会社の中すばすばタバコを吸う日本社会は16歳の天才少年を受け入れられるのがあり得ないのです。毎日夜中まで残業を勤めること、上司らとバー、居酒屋、そしてとても言えないところに連れて行かれたら法律上の問題が生じざるを得ません。これらの社会習慣が転換しない限りとび級制度は絶対に通らないと確信しております。

4. アメリカでは学生を一人一人成功に導く教育が行われている一方社会全体に貢献するように促すのは日本の教育観です。日本の公立学校はエリートを作るためになっていません。学生は皆同じ教育を受けて、同じ機会を与えるのです。エリートを作ろうとしない日本の公立学校ではエリートのためのカリキュラムは必要としません。

5. 公
立学校はエリートを作る場所ではないと言いましたが、それなら、どこで作るのだろうと、疑問に思っている人がいると思います。確かに日本には立派な学者がたくさんいるし、優秀な学生もいっぱいいます。日本人が優秀な成績を手に入れに行く場所は塾です。現在、普通の学校より良い教育を提供できるとまで言っている塾に皆が行くのです。はじめは塾がそうではなかったが、現在、日本中では盛んであって、経済的に日本の大きな力になっているのです。例え、どんな小さな町や村に行っても普通の学校があるのなら塾も必ずある言ってもいいでしょう。公立学校で Gifted Program やとび級制度などのエリート教育が導入されたとしたらこの大規模の企業は大損害を受けるでしょう。

最後に

日本の教育界に影響を及ぼす原因は数え切れないほどあります。その中、文化という大きいものがあります。さまざまな角度から様々の影響を与えられています。横並びをよしとする傾向から平和を求めたり、税金の支払いから平等を求めたり、することでしょう。結局日本は西洋のやり方を導入するには文化そのものを捨てて西洋の文化を取り入れてからではなければならないと思います。そうするにはよほどの苦勞と時間は要求されるし、日本そのものはなくいえるでしょう。それは儂いと言うまでもありません。まとめて言いますと Gifted Program やとび級制度は現在日本では無理なものであり、これ以上論じてもただ時間の無駄遣いであるといっても言い過ぎではないでしょう。